

# 計画案の夢

アンビット・プロジェクト

アトリエCOSMOS

'93~'95

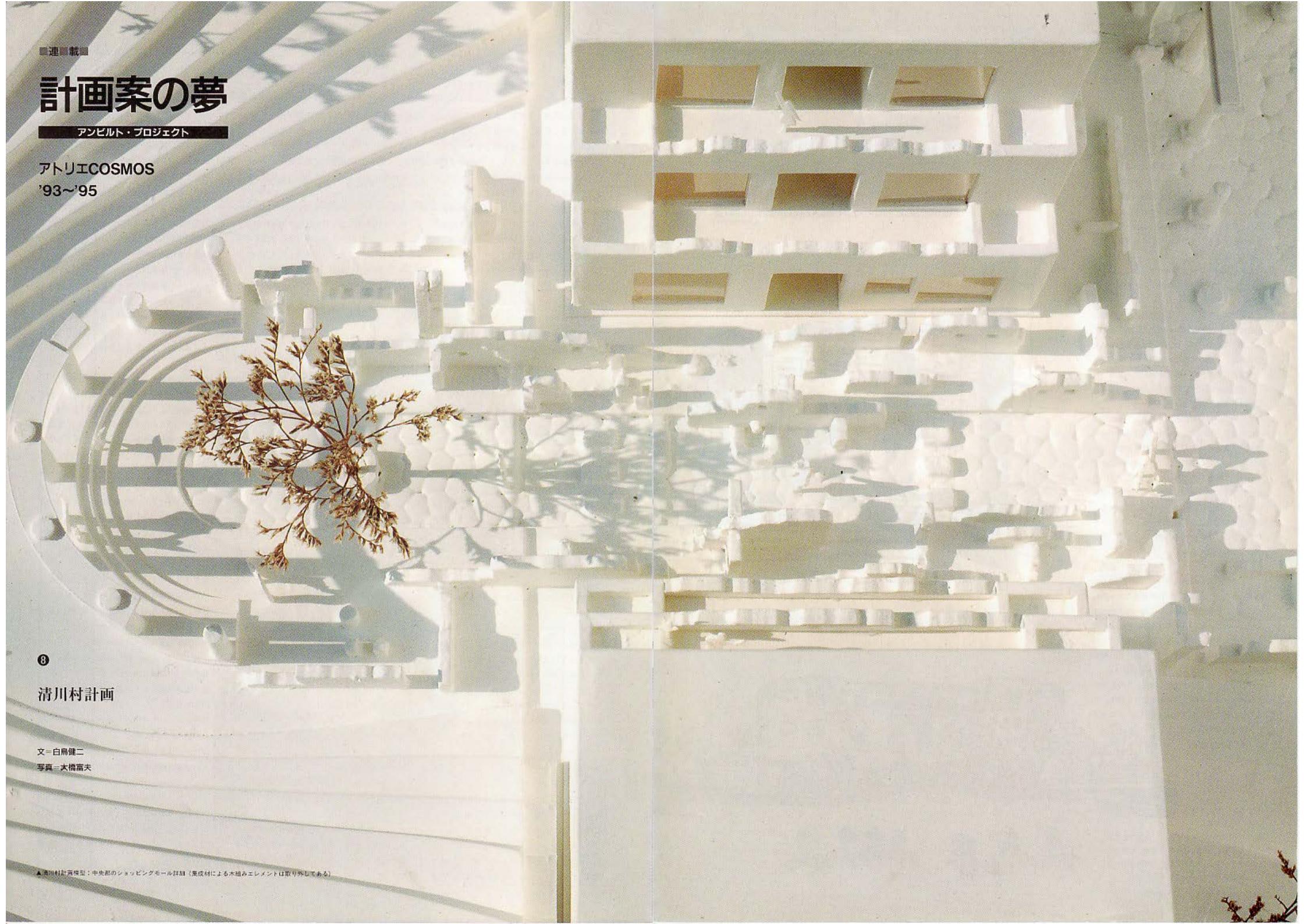
8

清川村計画

文=白鳥健二

写真=大橋富夫

▲清川村計画模型：中央部のショッピングモール計画（集成材による木組みエレメントは取り外してある）



# 清川村計画

—私の設計カタログから見つけた過去—

失われた時間と再会しながら自分を取り戻す、  
失われた自分と再会しながら過去を取り戻す、  
過ぎ去った過去と再会しながら、ゆっくりと  
噛みしめる何ともいえないこの安らぎ……、  
うん、今、私の体の中からゆっくりと消え  
ていくものがある、 知らないうちに蓄積さ  
れた何かいいようのない使いもの、 そんな  
硬さがすこへしづくんでいく、 そんな気  
持ちがする。

この遺跡は一体何者だろう？

(私のスケッチノートより)

イタリアの南部、ナポリに程近い地中海を望む  
熔岩台地に、ご存知ポンペイの大遺跡がある。

1968年の11月、私は偶然ここを訪れる事  
となつた。 帰ってくるあてのない、自由気ま  
まな無錢旅行を決行中のある日のことであった。

西暦50年頃までに建設されたポンペイが、  
発掘されるまでの1600年もの間、地中奥深く埋  
没していたのは周知の通りである。 30年ほど  
前のある日、私は朝はやくこの遺跡にやって  
きた。 人影のほとんどない古代都市で、丸一  
日、どっぷりと時間を過しながら廻廊の隅々を  
くまなく歩き回った。 そしてここで引出され  
るだけ多くのスケッチを描くこと ②その場所  
の環境 (PHENOMENA) を体に記憶させること  
③そしてそこから自分のボキャブラリーを  
探すこと。 これが私流の楽しみであり、自分  
流の空間体验法である。

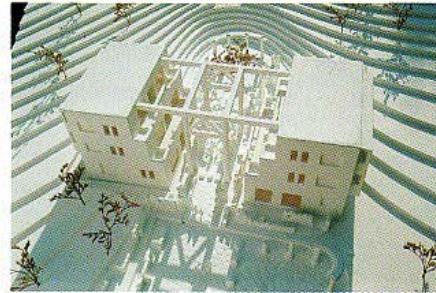
木だに僕の足の裏に残っている石畳のあの  
感触、 角のとれた丸っこい質感のある敷石、  
その格好、歩車道の境界沿いに並べられた大きな  
鋸歯、段差、足を引きすり上げた時のあの痛  
み、 無然と区画された街区、 無人の露地、 この  
露地に突き出している待ち果てた壁、柱、煙突、  
階段、そしてバルコニー、 etc……etc……。

かつて、ひとつの建築を構成していたそれ  
ぞれのエレメントが、1900年の年月を経て、今、  
こうして新たな自律性を保っている。 エレ  
メント達は、今再び偽りのな  
い「本当の姿」を私



【III】谷戸にまたがる

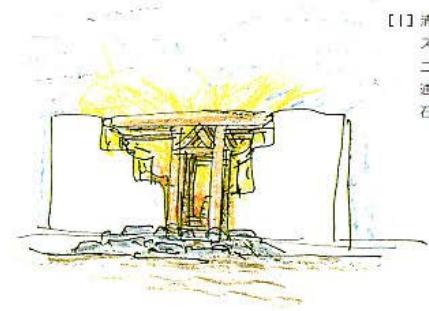
一対の建物  
この建物の中央を一気に抜けた30年  
前の私の記憶、私流の「過去」を建物の  
中央にコラージュする、 街路に沿った  
空間はショッピングモールとなる。



▲清川村計画模型

【IV】

計画名——清川村計画  
予定地——神奈川県相模原市北区  
主担当——佐藤伸作(空室) (12世帯)  
構造——鉄筋コンクリート造  
規模——地上3階建  
販売——200戸(200戸)  
延床面積——500,000m<sup>2</sup>



の前にさけ出している。

“廻廊とは、時の流れの中で再び原形に帰  
ろうとする状態”とパオロ・ソレリ(建築家、  
アーコサンティ主宰)は指摘する。“自然と  
は絶え間のない異質物間の整合である。 最初  
は全く別々な無機分子、他の分子達と連絡出来  
ない状態にある。 ところが、何かのきっかけ  
で分子同士が接触し合い、互いに話合うよう  
になる。 これが有機体のはじまり。”と述べる。

この廻廊は、まさにパオロの言う有機体か  
? 捨ち果てもなお生き物のように見える。  
自律したエレメント達は、互いに接触を保ちな  
がら私の手の前で会話をしている。 そんな気分  
が私の体に伝わって来る。 そんな環境が私の  
体内に断片的にまぎれ込んでくる。

“PHENOMENON”



【II】1968年11月28日の早朝、私はこの遺跡にやってきた。  
人影のない古代都市で丸一日、街路の隅々までくまなく歩き回った。



■計画コンセプト



八一对の階段種類



三重成材大鳥居の木組み



ムンペイの記憶

空間を生写しながら、それに要した時間在体内  
に記憶する。 そして、そこから自分のボキャ  
ブラリーを探し出し、私のノートに記録する。  
日本の隅々、世界の果てまで出掛けしていくたび  
に、私の「設計カタログ」のページが増えて  
いく。 最近そんなカタログのページをめくっ  
ていたら、偶然、30年前の私の「ポンペイ」と  
再会した。

地中海のやわらかな日差しを受けた静かな  
廻廊で過ごした丸一日。 その時の感覚が私の心  
の中に甦った。 私の足の裏に残っていたあの  
石畳の感触を思い出す。 人影のない静まりか  
えた街区、露地、そして捨ち果てた石造エレ  
メント達の無言の立派振る舞い。 この静寂な  
有機性のひとかけらでよい。 このたびの私の  
設計に欲しい。

清川村の谷戸の斜面にまたがって相対する  
一組の大型建築。 30年前のポンペイで体験し  
た「朝から晩まで」の一連始終が凝縮した時間  
空間。 私流の「過去」はこの現代建築の中央  
の間を一気にかけ抜けた。 あっという間の出来事だった。

一瞬、30年前の過去とかかわることによっ  
て、あの頃の記憶は、今私の体内からすこへし  
づく消えていく。  
廻廊とは一体何者であろう?